

青谷上寺地遺跡フォーラム

弥生の至宝

～花卉高杯とその背景～

青谷上寺地遺跡フォーラム

弥生の至宝

～花卉高杯とその背景～

二〇〇八

鳥取県埋蔵文化財センター



2008

鳥取県埋蔵文化財センター

ごあいさつ

鳥取県鳥取市青谷町に所在する青谷上寺地遺跡は、弥生時代後期に最も栄えた集落遺跡です。

本遺跡は、「地下の弥生博物館」、「見る魏志倭人伝」とも称されるように、通常では考えられないほど多種多様な遺物が多量に、それも良好な保存状態で見つかります。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、この遺跡の重要性に鑑み、平成13年度から国史跡指定をめざした発掘調査事業に着手し、弥生時代の人びとの活動拠点であった遺跡中心域のはじまりや変遷を明らかにしてきたところですが、平成20年3月28日に、日本の弥生時代を考える上で欠くことのできない重要な遺跡として、国史跡に指定されました。

この度の青谷上寺地遺跡フォーラムは、多くの皆さまに発掘調査や出土遺物の研究成果を知っていただければと、秀麗な花卉装飾が施されている木製高杯をテーマに「弥生の至宝 ～花卉高杯とその背景～」と題して企画させていただきました。

花卉高杯に込められた弥生時代の匠たちの息吹だけに留まらず、その機能や人と物の交流についても迫ることができればと存じます。

最後になりましたが、このフォーラムを開催するにあたり、快く参加をお引き受けくださり、玉稿を賜りました皆さま、多大なご協力をいただきました関係各位に心から感謝申し上げますとともに、ご参加いただきました皆さまにも、今後とも青谷上寺地遺跡の調査・研究にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年8月30日

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 久保 穰二郎

例 言

- 1 本書は平成 20 年 8 月 30 日に開催する青谷上寺地遺跡フォーラムのテキストとして作成したものです。
- 2 本書の編集は、鳥取県埋蔵文化財センターがおこないました。
- 3 本書は鳥取県埋蔵文化財センター職員が分担して執筆したほか、山田昌久氏（首都大学東京）、樋上 昇氏（(財)愛知県埋蔵文化財センター）、久田正弘氏（(財)石川県埋蔵文化財センター）に玉稿を賜りました。深く感謝申し上げます。
- 4 本書の作成にあたっては、掲載資料の提供などで多くの機関ならびに個人に御協力いただきました。巻末に記し、深く感謝申し上げます。

西暦	時代	青谷上寺地遺跡	日本	中国・朝鮮半島	中国	朝鮮						
BC.500	縄文時代 晩期				春秋・戦国時代	古朝鮮						
BC.400												
BC.300												
BC.200	前期	集落の形成が始まる		BC221 秦の始皇帝 中国を統一 BC202 劉邦、漢王朝をたてる	秦							
BC.100												
AD. 1	弥生時代 中期	ト骨による占いが始まる 鉄器が普及し始める 大型の板を護岸に用いた溝が造られる	<p>※本書に登場する弥生時代中期の主な遺跡 池子遺跡(神奈川県)、八日市地方遺跡(石川県)、下加茂遺跡(兵庫県)、南方(済生会)遺跡(岡山県)、朝日遺跡(愛知県)</p> <p>妻木晩田遺跡の集落形成が始まる</p>	BC108 漢、朝鮮半島に四郡(楽浪、玄菟、真番、臨屯)を設置	前漢	衛氏朝鮮						
							AD. 100	後期	<p>妻木晩田遺跡(洞ノ原地区)に環壕、四隅突出型墳丘墓が造られる</p> <p>57 奴国王、後漢に使いを送り、金印を授かる</p>	14 王莽、貨泉の铸造を始める 25 光武帝即位(後漢の始まり)	新	楽浪郡
AD.300	終末期 古墳時代 前期	集落の中心域を囲む溝が造られる 集落が衰退する	<p>※本書に登場する弥生時代後期の主な遺跡 西念・南新保遺跡、白江念仏堂遺跡、白江梯川遺跡(石川県)、袴狭遺跡(兵庫県)、五反配遺跡、西川津遺跡、姫原西遺跡(島根県)</p> <p>妻木晩田遺跡の住居数が最も多くなる(集落の最盛期) 180 頃 倭国乱れる</p> <p>239 女王卑弥呼、魏に使いを送る</p>	184 黄巾の乱起こる 204 頃 公孫康、朝鮮半島に帯方郡を設置 220 曹丕、魏をたてる(後漢の滅亡)	後漢	高原三句国時代 麗代						

青谷上寺地遺跡関連年表

目次

第1章	プロローグ		
	青谷上寺地遺跡とは		2
	青谷上寺地遺跡の木製容器		4
	【コラム】弥生時代の木製容器		6
第2章	花卉高杯の造形美と職人のわざ		
	花卉高杯とは		8
	花卉文様の種類		10
	花卉文様の規則性		12
	【コラム】飾耳のバリエーション		13
	【コラム】脚部のバリエーション		13
	花卉高杯の製作		14
	【コラム】文様の割付		17
	職人のわざを支えた道具		18
	【コラム】素材の選択		20
	【コラム】漆・顔料		21
第3章	花卉高杯の出現と展開		
	北陸地方の花卉高杯について	久田 正弘	22
	花卉高杯の果たした役割	樋上 昇	24
	【コラム】精製容器と粗製容器	樋上 昇	26
	【コラム】ハレの食器と装い		27
	青谷上寺地遺跡と花卉高杯		28
第4章	エピローグ		
	花卉高杯にみる「ものづくり」		30
	花卉高杯にみる「交流」		31
特別寄稿			
	「弥生時代」の権力表示器具類について考える	山田 昌久	32
図版目録			
参考文献			
協力者・協力機関一覧			

青谷上寺地遺跡とは

1 遺跡の環境

青谷上寺地遺跡は、鳥取県鳥取市青谷町青谷および吉川に所在する弥生時代前期から古墳時代前期初頭（およそ 2,300 年前～ 1,700 年前）に栄えた集落遺跡です。

低湿地という立地条件のため、この遺跡では通常の発掘調査でほとんど出土しない木や骨、金属などで作られた遺物が多量に、しかも極めて良好な状態で今日まで保存されています。まさに、遺跡自体が「地下の弥生博物館」、「見る魏志倭人伝」と呼ばれる由縁であり、その最たる例が国内の弥生時代遺跡では唯一となる脳^{あおやかみじち}の発見でしょう。

遺跡の位置する青谷町は、南側に滝や溪流が見られる緑豊かな中国山地が連なり、この山塊から伸びる丘陵は日本海付近まで突き抜けています。そして日置川や勝部川といった河川によって開かれた下流部分に、青谷平野が形成されています（図1）。

現在は平野であるこの場所には、弥生時代当時、日本海に面した部分に形成された海岸砂丘に流路を塞がれ、外海とは隔てられた内湾（潟湖^{せきこ}）が広がっ

ていました。遺跡は、この潟湖のほとりに営まれていたのです。

穏やかな内湾の環境は、現在では消滅したのものも含め、東北、北陸、山陰、北九州地域の日本海沿岸を主として分布しています。このような地形は、沿岸に対馬海流が北流することと合わせ、当時の海上交通に最も適した拠点の地として、積極的に利用されました。

2 多種多様な出土遺物

遺跡から出土した遺物には、土器、鉄器、青銅器、石器、木器、骨角器などがあります。豊富な遺物からは、農耕・狩猟・漁撈^{ぎょうろう}・祭祀^{さいし}といった当時の人々の生活が鮮やかに浮かび上がります。文字は残されていませんが、土器や木器には絵画を記しているものもあります（図2）。

特に、各種製品のみならず、製作に伴い生じる失敗品や未製品、また製作するうえで欠かせない道具類も併せてあることから、遺跡にはものづくりのための工房があったと考えられています。

図1 空からみた青谷平野



日常の生活痕跡に加え、人骨に残された殺傷痕跡や病気の痕跡、排泄物、また自然災害の爪痕などからは、青谷に生きた人々を取り巻く社会状況も垣間見ることができます。

遺跡の立地を象徴するかのよう、青谷上寺地遺跡から出土する遺物には、他地域との交流を示すものも多くあります。北陸地方との関係が示唆される高杯などの木製品や翡翠製勾玉^{ひすい まがたま}、西北九州から丹後にかけて分布する土笛などはその一例です。

交流の証拠は国内のみにとどまりません(図3)。古代中国の遺物としては、鑄造鉄斧やその破片の加工品、貨泉と呼ばれる当時のお金や青銅製の鏡などがあります。朝鮮半島からは、板状鉄斧や有肩鉄斧、また精神的な交流として、卜骨^{ぼっこつ}の集積遺構などがあります。この結果、青谷上寺地遺跡は「交易拠点としての港湾集落」という性格を帯びていることが少しずつわかってきました。

このように豊富に出土した遺物からは、「ものづくりの技術の高さ」、「国内外各地との交流の姿」、「弥生人の祈りや願い」、「弥生人の食生活」、そして「当時の人々の風貌や社会情勢」など、従来の考古学の常識を越えたレベルで、弥生時代の様子を深く具体的に追究することができます。

3 大地に残された痕跡

青谷上寺地遺跡には、当時の人々によって大地に残された遺構も多く残っており、矢板や杭、横板などを用いた木造の構造物が多くみられます(図4)。これらから、当時頻繁に土木工事が行われて



図3 中国や朝鮮半島から運ばれた遺物

いたことがわかります。このほかにも、水田や貝殻の捨て場、掘立柱建物跡、墓壇^{ぼこう}などが見つっていますが、竪穴住居跡は未だ見つかっていません。低湿地という遺跡の立地環境から考えて、地面を掘りくぼめて作る竪穴住居は不適當な居住形態だったのか、それとも他の場所に住居があるのか、もしくは竪穴住居以外の形態の住居が存在したのか……。青谷上寺地遺跡の人々が日常の寝泊まりの場とした空間は、いったいどのようなものだったのでしょうか。今後の調査課題の一つです。



図2 サメが線刻された土器



図4 矢板を用いた木造構造物

青谷上寺地遺跡の木製容器

青谷上寺地遺跡から出土した木製容器は、破片を含めておよそ1,000点を数えます。弥生時代の土器の種類が甕・壺・高杯など、あまり多くないのに対し、木製容器の場合は高杯、椀、壺、桶形容器、桶、槽、^{くりもの}刳物箱、^{まげもの}曲物、^{さしもの}指物箱など様々な種類が存在します。

これらの木製容器は、現代でも行われている製作技法によって作られていることがわかっています（下表）。

また、木製容器に使われている木の種類や加工の向きを調べていくと、一定の規則性がうかがえます。例えば、大型の容器には、生長が早くて大径木になり、加工が容易なスギがよく利用されていますし、精巧な造りのものには、硬くて木目のきれいなヤマグワが利用されています。

高杯や槽など口が広くて浅い容器を作る場合と、桶など口が狭くて深い容器の場合では、木材の加工の向き（木取りといいます）が異なっていることがわかっています。

これらは、当時の人々がいろいろな木の性質を熟知し、木材の有効利用を考えた上で加工してい

たことを物語っています。

青谷上寺地遺跡では、木製容器の出土量の多さや様々な工具類の出土などから、弥生時代の木の匠たちの存在を知ることができます。青谷上寺地遺跡の最盛期である弥生時代後期には出土量も増え、弥生木工の傑作と考えられる「花卉高杯」が登場します。

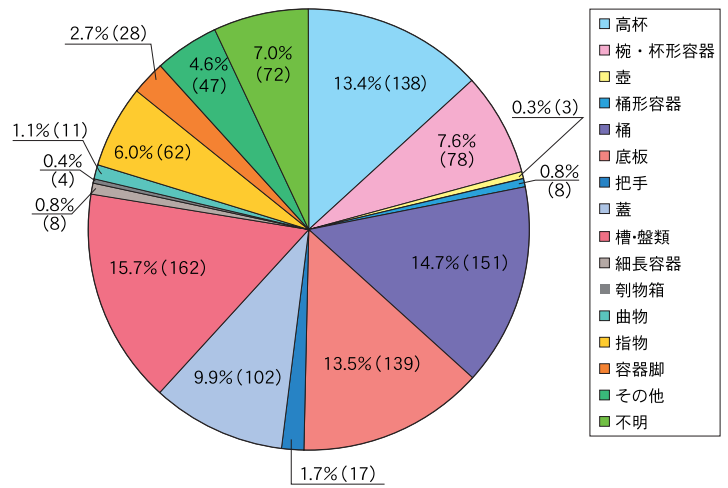


図5 青谷上寺地遺跡出土木製容器の器種組成

くりもの物	刃物で木材を刳り抜いて作る容器。 【高杯、椀、桶形容器など】
ひき挽もの物	粗く加工した木材をロクロにかけて刃物で削って作る容器。 【高杯など】
まげもの物	薄い板や樹皮などを丸めて筒状にし、底板に釘などで固定した容器。
さしもの物	板材を組み合わせて、木釘や樹皮等で固定した容器。

表 木製容器の種類

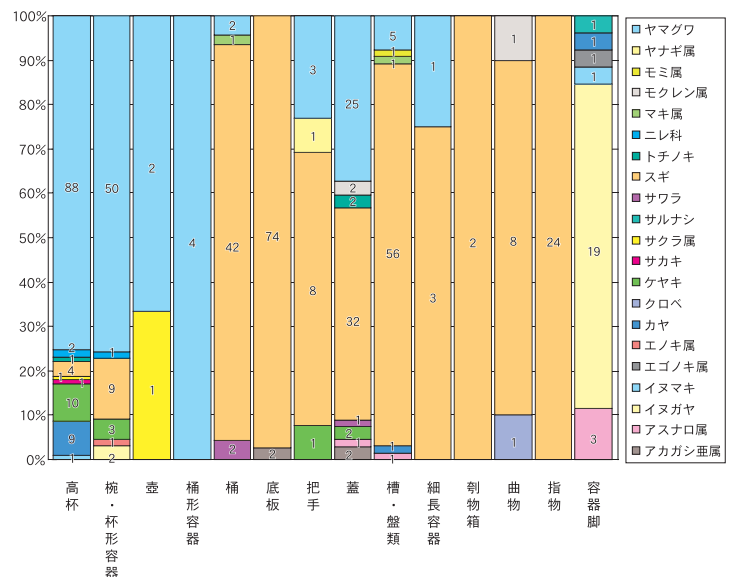


図6 青谷上寺地遺跡出土木製容器の樹種割合



椀（弥生時代後期）イヌガヤ



桶形容器（弥生時代中期）ヤマグワ



壺（弥生時代後期）ヤマグワ



刳物箱（弥生時代中期）スギ



桶（弥生時代後期）スギ



槽（弥生時代後期）スギ



指物箱（弥生時代後期）スギ



曲物底部（弥生時代後期）モクレン属



容器脚（弥生時代後期）イヌガヤ

図7 青谷上寺地遺跡出土の木製容器

弥生時代の木製容器

国内の遺跡では、縄文時代から木製容器の製作が確認されていますが、弥生時代になると、大型化や指物などそれまでにない技法の出現がみられます。これは弥生時代の特徴の一つである「鉄器」が広がることにより、石器で製作していた縄文時代に比べて製作技術が著しく向上したものと考えられます。

また、近年では青谷上寺地遺跡をはじめとした

低湿地遺跡の発掘件数の増加や、調査研究の進展によって、木製容器の情報がかなり増加しています。中でも山陰と北陸を中心とした日本海沿岸地域には、桶や高杯などに形態の類似性が強く認められます。また、鉄器や玉などもこの地域でかなり流通していることから、活発な交流活動を行っていたことが推測されます。

島根県出雲市海上遺跡 合子
(弥生時代中期～後期)

島根県出雲市姫原西遺跡
ジョッキ形容器 (弥生時代後期)

島根県西川津遺跡
妻木晩田遺跡

青谷上寺地遺跡

兵庫県豊岡市袴狭遺跡
(弥生時代後期)

高杯脚部

福岡県筑前町惣利遺跡 杯形容器
(弥生～古墳時代)

佐賀県小城市生立ヶ里遺跡 漆塗り槽
(弥生時代中期)

岡山県岡山市南方 (済生会) 遺跡
彩文高杯 (上) とジョッキ形容器 (下)
(弥生時代中期)

大阪府東大阪市鬼鹿川遺跡 高杯杯部
(弥生時代中期)

大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡 高杯
(弥生時代前期)



石川県金沢市西念・南新保遺跡 桶(上・右)
(弥生時代後期)



石川県小松市八日市地方遺跡 合子
(弥生時代中期)



石川県白江梯川遺跡
白江念仏堂遺跡

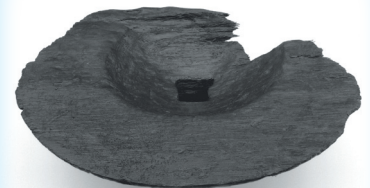
愛知県清洲市朝日遺跡 高杯杯部
(弥生時代中期)



神奈川県逗子市池子遺跡群
一木式高杯(上)と組合せ式高杯(下)
(弥生時代中期)



三重県津市六大A遺跡 曲物底部
(弥生時代後期～古墳時代)



奈良県田原本町唐古・鍵遺跡 蓋付高杯(左)と蓋付四脚容器(右)
(弥生時代中期)



静岡県静岡市川合遺跡
組合せ式高杯杯部(上)と脚部(下)
(弥生時代後期)

花卉高杯とは

1 高杯とは

高杯は食物を盛るための脚付きの台です。今でこそ神仏への供物を載せているのを見かけるくらいですが、弥生時代から古墳時代にかけては盛んに使われていました。もともとは弥生時代の初めに稲作文化とともに朝鮮半島から日本に伝わってきたと考えられています。

高杯には木製（木器）と土製（土器）があります。初めの頃は木器のほうが多く使われていましたが、次第に土器の数が増えていきました。弥生時代中期には、製作技術の向上とともに盛んに作られるようになります。日常用からマツリ用まで、用途に応じてさまざまな形や大きさのものがああります。



図9 青谷上寺地遺跡出土の花卉高杯復元品

2 花卉高杯の出現

弥生時代後期になると、杯部外面に花びらのような放射状の浮き彫り（花卉文様）が施された美しい木製高杯が、日本海沿岸地域に現れます。この高杯を「花卉高杯」と呼ぶことにします（図9）。

花卉高杯には浮き彫りのほかにも、

- ① 真っ赤に塗られた器面
 - ② 杯口縁部から外へ飛び出す飾耳^{かざりみみ}
 - ③ 脚部に施された段と透かし
- といった特徴があります（図10）

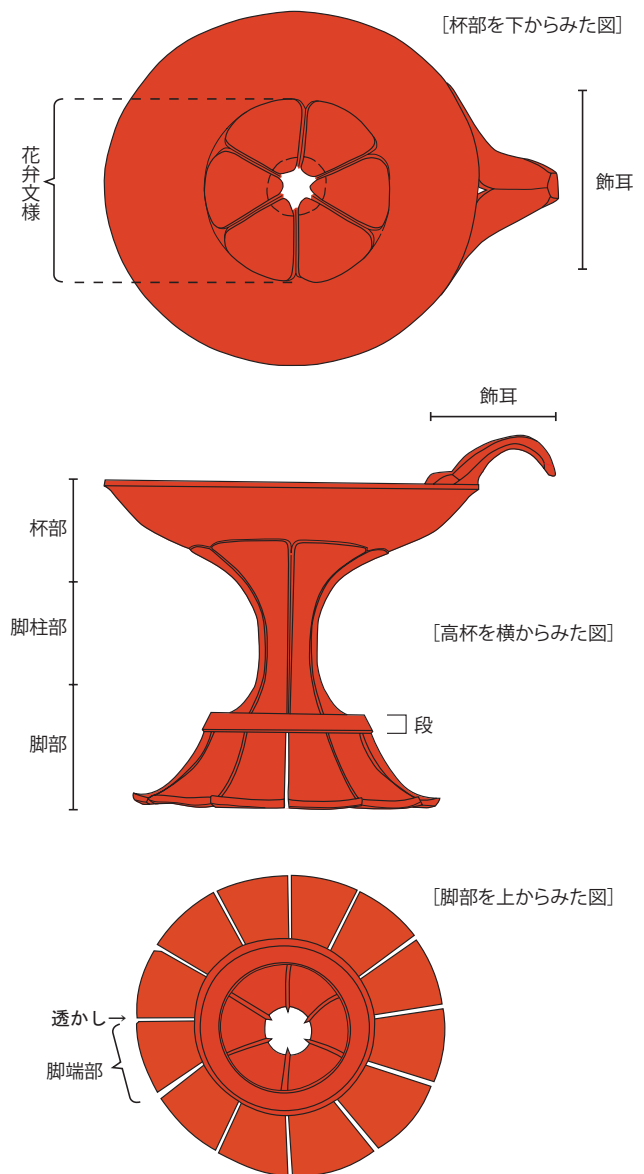


図10 花卉高杯 模式図

3 花卉高杯の起源

花卉高杯がいつ、どこで、どのようにして生まれたのか、はっきりしたことは分かりませんが、弥生時代中期にその祖形を見ることができます。

脚部の特徴である段と透かしは、もとは脚部下面に作り出された突起が丈を伸ばし、発達したものと考えられます(図11)が、杯部はまったく異なる形をしています。そこで花卉高杯から脚部を切り離してみると、その形は横杓子と呼ばれる木



図12 兵庫県下加茂遺跡の横杓子

器によく似ています(図12)。杓子は食物をよそう食事具ですが、中でも柄に美しい装飾が施されたものは、マツリ場で使われたのではないかと考えられています。花卉高杯もマツリに用いられる特別な道具だったと考えられます。

4 花の意味するもの

古今東西、花はさまざまな装飾のモチーフに用いられてきました。

たとえば古代オリエントではスイレンが容器の装飾に多用されました。放射状の花びらと、朝に花が開き、夜に花が閉じるその姿から、太陽神や再生の象徴とされていました。東アジアではハスの花が極楽浄土の象徴として、寺院の軒丸瓦や仏座にあしらわれました。

上向きに開いた花卉高杯の花弁文様は、器面に塗られた赤い色とともに「生命」を象徴していたのかもしれませんが。



図13 ハスの花



図11 木製高杯脚部の変化

花卉文様の種類

高杯の花卉文様は、4弁、5弁、6弁の三種類に分類することができます。このデザインは元々円とそれを分割する線から発展したものと考えられ、④ ⇒ ⑥ ⇒ ⑤ (弁) の順に幾何学的に高度になっていきます。

現在までのところ青谷上寺地遺跡以外では、4弁の高杯が島根県で2点、6弁のものが島根県と石川県で4点出土しています。5弁の高杯は他の遺跡で出土例がなく、しかも1点しか出土していません。

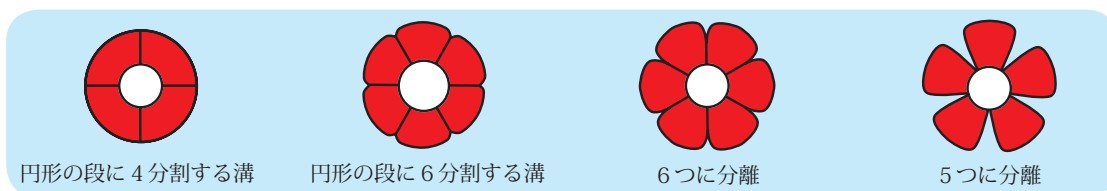


図14 花卉文様の変化

4弁



図15 青谷上寺地遺跡出土高杯(弥生時代後期) カヤ



図16 杯部の花卉文様(拡大)



図17 島根県姫原西遺跡出土高杯(弥生時代後期) カヤ



図18 島根県五反配遺跡出土高杯(弥生時代後期)

6 弁



図19 青谷上寺地遺跡出土高杯（弥生時代後期） ヤマグワ



図20 青谷上寺地遺跡出土高杯（弥生時代後期） ヤマグワ



図21 青谷上寺地遺跡出土高杯（弥生時代後期） ニレ科



図22 石川県西念・南新保遺跡出土高杯（弥生時代後期） ケヤキ



図23 石川県白江念仏堂遺跡出土高杯（弥生時代後期）



図24 石川県白江梯川遺跡出土高杯（弥生時代後期） ヤマグワ



図25 島根県西川津遺跡出土高杯（弥生時代後期）

5弁

5弁の高杯は1点しか出土していませんが、同様のデザインが施された漆塗りの壺が出土してい

ます。彫刻だけでなく、描くデザインでも「5弁」が意識されていたことがわかります。

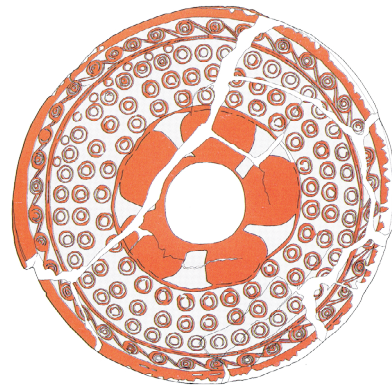


図26 青谷上寺地遺跡出土高杯（弥生時代後期） ヤマグチ

図27 青谷上寺地遺跡出土漆塗り壺（弥生時代後期） サクラ属

花卉文様の規則性

花卉文様は木材の繊維方向に直交する向きを基準としています。4弁では繊維と直交・平行に溝が彫られます。6弁の場合は繊維と直交する方向

に溝を彫り、それを基準として、円の半径を使って6等分します。5弁の場合は一つの溝を繊維に直交する方向に設けています。



図28 花卉文様の配置と木材の繊維方向

飾耳のバリエーション

花卉高杯の多くには、口縁部に1ヶ所飾耳が作られています。これはそれまで製作されてきた木製高杯や土製高杯には見られない特徴です。青谷

上寺地遺跡では飾耳の断片のみの出土もありますが、ひとつとして同じものはありません。これは花卉高杯の一つの特徴といえます。



図 29 青谷上寺地遺跡出土の飾耳

脚部のバリエーション

花卉高杯の脚端部裏側の形状は杯部と異なり、非常に多彩です。

三角形・四角形・五角形のもの、端部が全てつながっているものなど、表側は共通した形状をしています。裏側には匠の個性ともいべき痕跡が残されています。

また、花卉の数と脚端部の数は2倍の関係が成り立ちます(図10参照)。

6弁 ⇒ 12(脚端部)、5弁 ⇒ 10(脚端部)

4弁 ⇒ 8(脚端部)

中には、姫原西遺跡のように、4弁 ⇒ 12(脚端部)という3倍の関係をもつものもあります。

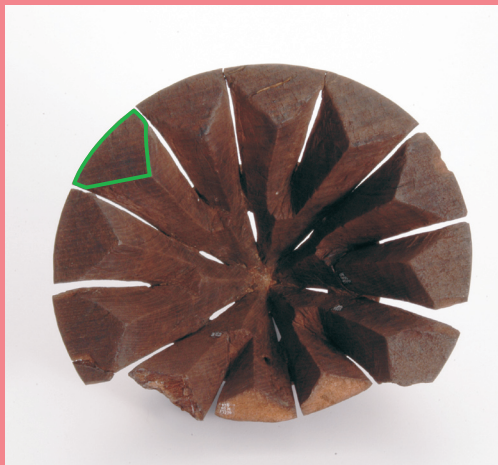


図 30 五角形の脚端部裏側



図 31 四角形の脚端部裏側



図 32 三角形の脚端部裏側



図 33 輪状に連なる脚端部裏側

花卉高杯の製作

青谷上寺地遺跡で出土した木製品をよく観察してみると、当時の職人たちの工夫の跡を見て取る

ことができます。ここでは、そうした「職人のわざ」を、高杯を通じて見ていきましょう。

【^{くりもの}削物】と【^{ひきもの}挽物】

木製品は、その製作技法によって、「削物」・「挽物」・「指物」・「曲物」などに分類されます。このうち高杯は、「刃物で材を削り抜いて形を整えた」削物と「粗く加工した材をロクロにかけて回転成形した」挽物の2種類に分けることができます。では、出土した高杯が「削物」なのか「挽物」なのか？

削物だとすると、高杯の表面に削抜いた痕跡を見て取ることができ、挽物だとすれば、回転していたことを示す同心円状の痕跡を、その形状や加工の痕から見て取れるはずです。

このような視点に立って、青谷上寺地遺跡で出土した高杯を観察してみましよう。

図34 削物の高杯



杯部外面に形を整えた際についた、細かな工具の痕跡を見て取ることができます。



この高杯には、全体に形を整えた際についた、細かな工具の痕跡をよく見て取ることができます。



挽物ならば、平面の形状が正円になるはずですが、この高杯は正円になっていません。

図35 挽物の（可能性がある）高杯



平面の形状や加工の痕跡が同心円状になっていることから、挽物であることがわかる一例です。
(石川県金沢市西念・南新保遺跡出土高杯)



青谷上寺地遺跡では数が少ない挽物と考えられる高杯です。平面の形状が正円となっています。



脚部の外面に、3本1組のとても繊細な突帯がきれいに廻っています。回転する力を利用したと考えられます。

【一木式】と【組合せ式】

高杯には、杯部から脚部までの全体を、一本の木を削りぬいてつくる「一木式」と、杯部と脚部



図36 「一木式」により作られた高杯の一例
いずれも一本の木から丁寧に形作られた「削物」の高杯です。

などを2・3箇所に分けて作り、それらを組合せる「組合せ式」の2種類の作り方が見られます。



図37 受部から脚柱部（上）、脚柱部から脚部（下）
いずれも、木目が途切れることなくつながっており、一木から作られたことがうかがえます。



図38 「組合せ式」により作られた高杯の一例
杯部と脚部がそれぞれ破損しており、その繋がりを詳しく知ることはできませんが、組合せるための工夫の跡を見ることができます。



図39 組合せ式高杯の組合せ部分
上は、杯部と脚部を組合せる部分に別の材で作った「ほぞ（雇いほぞ）」を用いています。この様なほぞが残っていた例はわずかですが、下に見られるように、ほぞ孔が施された杯部からも組合せていたことがわかります

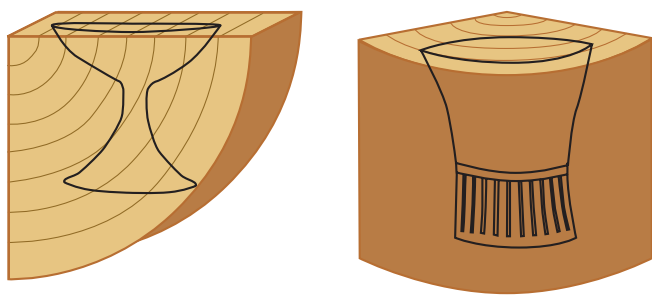
【横木取り】と【縦木取り】



図40 横木取りの木製容器

木製容器を分類してみる場合、「木取り」も重要な要素となります。この木取りは、木材の木口面（横断面）を上にして加工した縦木取りと、木材の縦断面を上にして加工した横木取りに分類することができます。

青谷上寺地遺跡で出土した高杯は、その全てが横木取りとなっています。この木取りを、他の木製容器についてもみてみると、高杯をはじめとした、口が広く、背の低い（浅い）ものは横木取り、



横木取り

縦木取り

図42 木取り概念図



図41 縦木取りの木製容器

口がやや狭く、背の高い（深い）ものは縦木取りにしている傾向が見られます（図43）。口の広さや高さなど、出来上がりの大きさによって、どう木取りすれば、切り出した材を最も有効に活用できるのか。弥生時代の匠たちは、単に美しさや、機能を追及したのではなく、自然から与えられた恵みを大切にしていたことをうかがいすることができます。

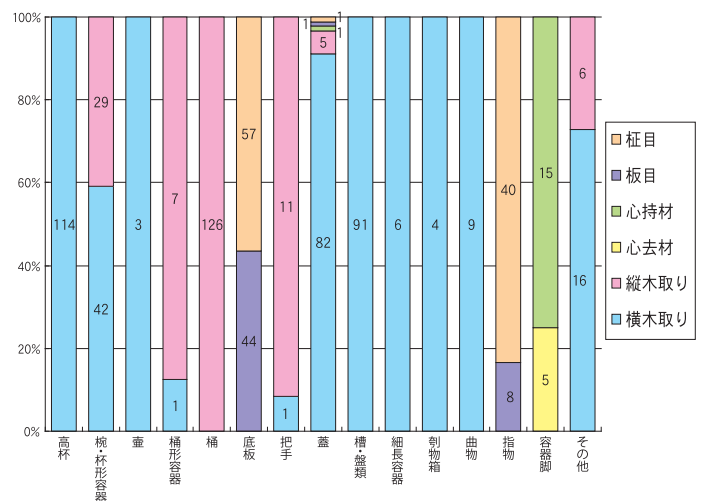


図43 青谷上寺地遺跡出土木製容器の木取り統計グラフ

文様の割付

青谷上寺地遺跡から出土した木製品の中には、花卉高杯をはじめ、とても精緻なデザインが施されたものがあります。これらはとても規格性が高く、約1,800年前の弥生時代に、高度な割付技術やそれを支えた道具が存在したことをうかがわせます。

図44は、花卉高杯（6弁）の文様を撮影したものです。杯部の裏側には、口径（口縁部の直径）の約半分を直径とする正円を描き、その円を六等分しています。脚柱部から脚部上半にかけて、この六等分の流れで文様を施し、径が大きくなる脚部下半ではさらに分割して十二等分にしています（図45）。

図46は図44の一部を拡大したものです。花卉



図46 花卉高杯杯部の割付痕跡

文様の外縁に弧状の段が見えますが、これは「コンパス」のようなもので「しるし」をつけた後に彫られたものだと考えられます。「コンパス」の痕跡は、他の資料でも確認することができます（図47）。このような「コンパス」の存在により、正円の描写や均等な割付が可能になったと考えられます。



図44 花卉高杯杯部の割付



図45 花卉高杯脚部の割付



図47 コンパス状の工具で円が描かれた木製品

職人のわざを支えた道具

青谷上寺地遺跡は、花卉高杯をはじめとする木製容器のほか、碧玉製の管玉や水晶製の小玉など、「ものづくり」が盛んにおこなわれました。その背景には、スギなどの豊富な資源の存在とともに、交易拠点となりうる立地条件の良さと、中国・朝鮮半島や北部九州からもたらされた当時の最先端技術があったと考えられます。ここでは、花卉高杯の製作工程と各工程で使用する道具を整理し、当時の「職人のわざ」と「職人のわざを支えた道具」を見ていきましょう。

1 伐採

木の伐採には、石製や鉄製の伐採斧が用いられました。当時すでに、鉄製の斧は加工斧として使用され始めていますが、木を切り倒すには、まだまだ大型の石斧が主流でした。

2 分割

ノコギリが無かった弥生時代。製材には、「楔」などを使って分割する方法が用いられました。花卉高杯をはじめとする木製容器の素材には、こうして分割した規格性の高いものが使われています。

3 粗加工・成形

「扁平片刃石斧」・「袋状鉄斧」などを刃先とした

「手斧」や、「石鑿」・「鉄鑿」などを用いて、分割した素材を加工していきました。図48は漆塗り壺の内面を写したものです。漆塗り壺の内面に残る加工痕は、幅4～6mmで、鑿等の小型工具で加工されたことが分かります。

4 割付・装飾

割付をおこなって文様の下書きをしたあと、「鑿」などを使って装飾を施していきます。複雑な装飾が施されるようになった背景には、細かな加工を可能にする鑿類の増加や機能分化があったと考えられます。青谷上寺地遺跡では、図49のような特殊な小型鉄製工具も見られるようになります。

5 整形・仕上げ

「鉋」で表面を削って、整形していきます。中には、表面を磨いて仕上げるものもあります。

このように、ひとつのものを完成させるために、様々な道具が使用されたことが分かります。中でも仕上げに近い工程では、鋭利な鉄製品が欠かせない存在でした。青谷上寺地遺跡の職人たちは、自分たちが使いやすい独自の道具を創造し、使い分けることで、花卉高杯に代表される秀麗な木製品を作り上げていったのです。

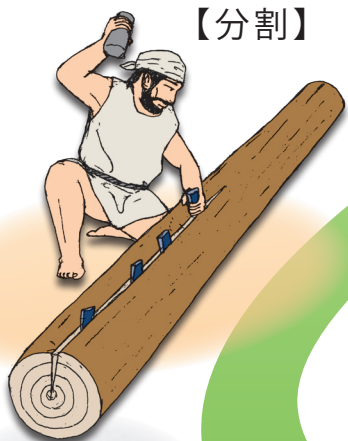


図48 漆塗り壺内面の工具痕



図49 特殊な小型鉄製工具

【分割】



楔

【伐採】



伐採具（大型蛤刃石斧）

【粗加工】



粗加工具（石斧、鉄斧）

【成形】



鑿、刀子



鹿角製柄付鑿

【割付・装飾】



小型鉄製工具



【整形・仕上げ】



鈍

素材の選択

素材の選択、すなわちどのような原材料を選ぶかということはものづくりの出発点であり、製品の出来栄を左右するとても重要な要素です。青谷上寺地遺跡の匠たちも、周囲に広がる豊かな森の中から、こだわりを持って素材となる木を選んではいました。

青谷上寺地遺跡の木製容器の材料として特に多く使われたのは、ヤマグワとスギです。

ヤマグワは、花卉高杯を含む高杯や、椀・杯、蓋を持つ桶形容器など小型容器の材料として広く使われました。ヤマグワは硬くて光沢があり、木目の美しい木ですので、花卉高杯などの精巧な品に好んで使われたのでしょう。同じく硬くて木目の美しい木材としてケヤキがあり、北陸地方の花卉高杯に使われています。

スギはまっすぐ伸びて生長が早いこと、割れやすく加工しやすいことから、割物桶や槽、盤な

ど比較的大型の日用雑器に多く使われました。また、容器の他にも建築部材に多く利用されています。

ヤマグワ、スギの他にも多くの木が使われました。漆塗り文様のある壺、蓋、曲物の底に使われたのはモクレン属、サクラ属の木です。漆などで文様を描く場合、ヤマグワではその美しい木目がかえって邪魔になります。そのため、肌目が細かくきれいな下地を得ることのできるモクレン属、サクラ属の木が選ばれたのでしょう。

容器の脚には、イヌガヤが多く使われました。イヌガヤは弾力性があり、容器の本体に斜めに取り付けることによって、本体にかかる重量をうまく分散させることができたと考えられます。

このように、弥生時代の匠たちは、木の特徴を熟知し、それを最大限に活かすべく、用途に応じて素材を使い分けていたのです。

図 51 青谷上寺地遺跡出土木製品に使用されている木材の例



ケヤキ（広葉樹）：幹が太く、硬い。木目が美しい。
【主な用途】 高杯、杯、椀など



サクラ属（広葉樹）：木肌が緻密で保存性がある。
【主な用途】 漆塗りの壺など



クワ属（広葉樹）：硬く光沢がある。木目が美しい。
【主な用途】 高杯、杯、椀など



スギ（針葉樹）：まっすぐ伸び、生長早い。加工しやすい。
【主な用途】 桶、槽、建築部材など

漆・顔料

【漆】漆とは、ウルシ科ウルシノキ属の植物が分泌する樹液をいい、英語では *japanese lacquer* と呼ばれています。国内での漆の使用例としては、埴ノ島B遺跡（北海道函館市）出土の漆製品が最も古く、縄文時代早期（約9,000年前）まで遡ることができます。山陰地方では、縄文時代前期（約6,800年前）の夫手遺跡（島根県松江市）で漆液容器が確認されています。

漆の採取から精製にかけての工程は非常に手間がかかるため、漆の利用には計画的で専門的な知識が必要でした。精製された漆は、それ自体で「塗料」としての役割を果たすうえ、乾くと硬くなるという性質を利用して、例えば、石で作った鏃を木製の矢柄に取り付けたり、土器を補修する際の「接着剤」としても利用されました。

青谷上寺地遺跡の人々は、漆にベンガラなどを混ぜた赤漆や、木炭の粉と煤を混ぜた黒漆を作り、製品に塗りました。漆を使うと、光沢が出て艶やかな発色になることを知っていたのでしょう。前者には木製高杯や盾、後者には木製匙や壺（図52）などが挙げられます。

ちなみに、生の漆が肌などに触れるとかぶれますが、これは漆の主成分であるウルシオールによるアレルギー反応によって起こる症状です。ウルシオールのアレルギーを持つ人は、稀に漆の木まの近くを通っただけでもかぶれることがあります。人々は古来から、漆には邪悪なものを寄せ付けない特別な力があると考えていたようです。



図52 黒漆の下地に赤漆で文様を描いた壺

【顔料】青谷上寺地遺跡には、赤や黒、緑色に彩色された木製品があります（図53）。その色彩は、自然界の様々な材料（顔料）を用いて表現されています。その顔料が何なのか特定するためには、それがどんな原料でできているかを調べる必要があります。顔料が塗られた部分に放射線を当てて成分を調べました（蛍光X線分析）。

分析の結果、青谷上寺地遺跡出土品で赤色に塗られた遺物には、水銀朱やベンガラが使われ、特にこの遺跡では水銀朱が多用されていることがわかりました。さらには、一つの木製品で水銀朱とベンガラの両方を重ね塗っているものが存在することもわかりました（図54）。先ほどの漆を下地としてまず製品に塗り、その上にベンガラを塗って、仕上げとして水銀朱を塗るという手間ひまがかかっています。この手法は、粒子の細かいベンガラを下地に塗ることで遺物表面を滑らかにして、水銀朱の発色をより鮮やかにするための方法といわれています。当時の人々は、より美しい赤色を表現するために、様々な工夫を凝らしていたようです。



図53 赤く塗られた花卉高杯と飾耳

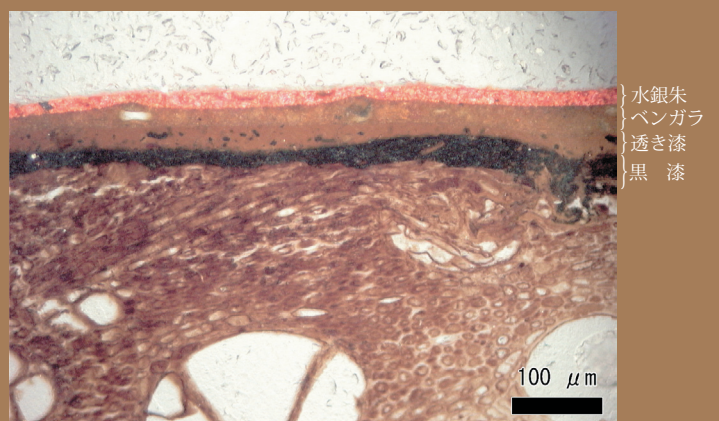


図54 赤く塗られた木製容器の塗膜構造

北陸地方の花弁高杯について

1 はじめに

花卉高杯は、昭和55年に発掘調査された金沢市西念・南新保遺跡で最初に発見されました。翌昭和56年には小松市でも出土しています。また、平成14年に小松市でさらに1点出土し、現在石川県では合計3点の出土例があります。ここではその概要を紹介したいと思います。

2 金沢市西念・南新保遺跡

金沢市街地から北西方向、海岸部から約4km内陸に位置します(図55)。犀川の河口と浅野川が合流した大野川の河口に近い位置にあり、低い沖積平野の舌状に伸びる微高地上に立地します。

遺跡の主体は、弥生時代中期後半～古墳時代前期前半であり、北方向に流れる川跡に接した環濠集落です。集落は大きく、北東・中央・西の3地区に分かれ、弥生時代後期の集落は川跡の東側にある中央地区にあります(図56)。中央区は数本の環濠によって北と南に区画され、後期初頭では北側に中心がありましたが、後期中頃と後半には南側に中心が移りました。花卉高杯は中央地区南側(B-1区)にある環濠から出土しました。樹種はケヤキで、外面は赤彩され、内面は漆塗りです。

3 白江念仏堂遺跡

小松市の北側に位置し、周辺は多くの瀉や河川

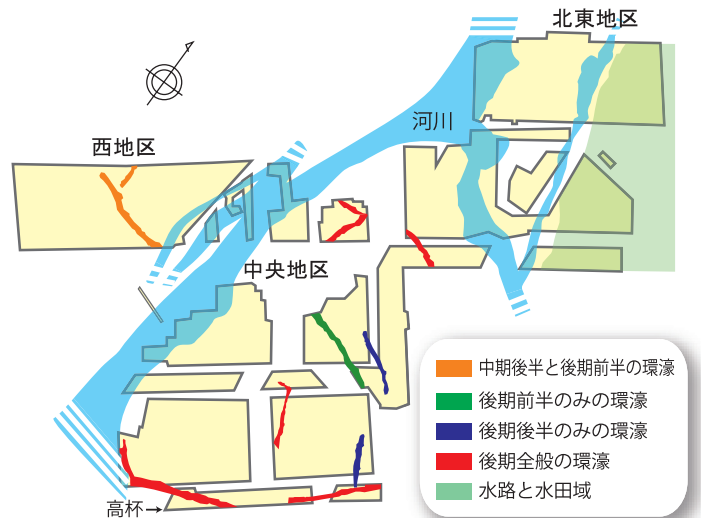


図56 金沢市西念・南新保遺跡遺構配置図

が入組んでいます(図57)。白江町は梯川の河口から直線距離約5.4kmにあり、周辺は蛇行した梯川の痕跡が確認されています(図59)。遺跡は白江町の南東側に位置し、南調査区では古墳前期頃の溝や土坑があり、花卉高杯は幅約5.5mの第8号溝から出土しました。第8号溝は数本の溝が重なっているのですが、下層は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器や、高杯やタモなどの木製品が多く出土しました。花卉高杯は赤彩されており、杯部と脚部が接して出土(図58)していることから、同じ個体と思われます。遺跡からは、鳥形土器、銅鏃、琴柱形石製品、竿つるべなどが出土しています。

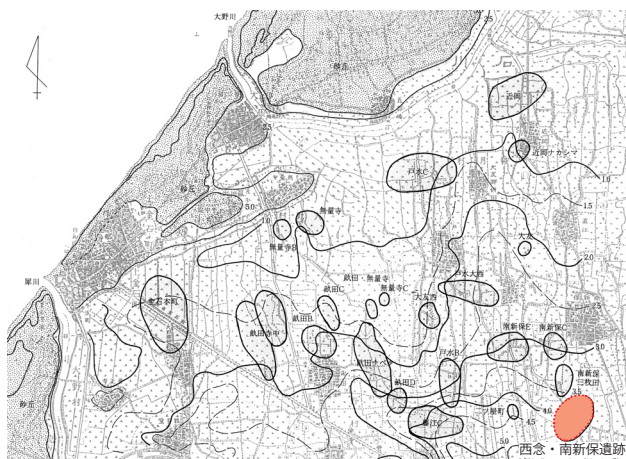


図55 石川県金沢市周辺の遺跡分布図



図57 石川県小松市周辺の地形と遺跡分布図

白江念仏堂遺跡やその上流（東側）にある漆町遺跡群では、弥生時代後期後半から遺構が確認され、後期末にはほぼ全面に拡大して、古墳時代後期まで多くの遺構や遺物が出土しました。土器は畿内・山陰・東海地方の影響を強く受けていることがうかがえます。他にも、石釧・紡錘車・管玉などを作っており、準構造船を模した舟形土製品も出土しています。

4 白江梯川遺跡

白江町の北西側には集落域があり、2本の川跡と水田域がありました（図59）。平成14年度調査区は一番下流（西）側にあたり、幅60m以上の川跡から多量の木製品と少量の土器が出土しました。土器は弥生時代後期前半～後半が中心で、前後の土器が若干あります。花卉高杯は調査区北側の土層断面から出土し、内外面は水銀朱が塗られ、樹種はクワ属です。木製品は建築や船関係の部材などが多いのですが、花卉高杯以外にも容器の脚（イヌガヤ製）や編物容器の底板（カキノキ属製）などの青谷上寺地遺跡との関連がうかがえるものが出土しています。

白江町が弓状の形をしているのは、蛇行した川跡の自然堤防上に立地しているからだと考えられます。白江念仏堂遺跡と白江梯川遺跡の最短距離は500mと近く、同じ集落だった可能性もあります。

5 おわりに

石川県加賀地方では、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて、土器や木製品などに山陰地方の強い影響が認められます。それは、山陰地方の人々が、船を使って加賀地方に頻繁に訪れたからだと考えられます。花卉高杯が出土したこの3遺跡が日本海との水上交通に便利な位置に立地しているのは、偶然ではないと思われます。



図58 小松市白江念仏堂遺跡 花卉高杯出土状況

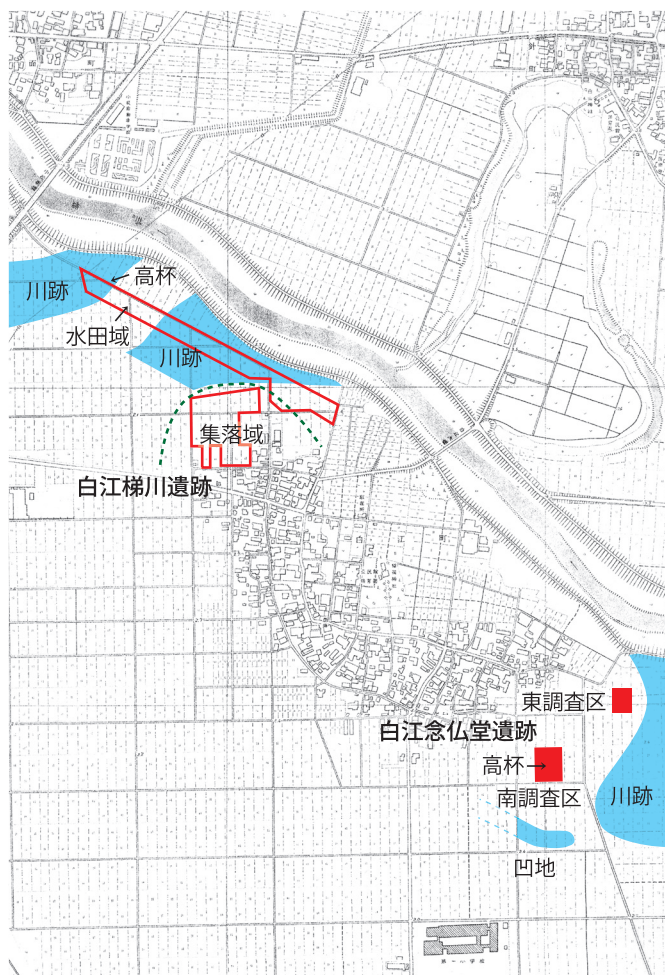


図59 小松市白江念仏堂遺跡（右）と白江梯川遺跡（左）の位置関係

花卉高杯の果たした役割

1 青谷上寺地遺跡における2タイプの精製容器

青谷上寺地遺跡から出土した花卉を陽刻した精製の木製高杯と、それに近い関係にあるスタンプ文ないしは赤彩を施した脚付壺は、その出土傾向から大きく2つのタイプに分けることができます。

一つは、青谷上寺地遺跡以外からは全く出土しないもの、もう一つは島根県の出雲平野から北陸の金沢平野にかけての日本海沿岸地域に広く分布するものです。右図の上が前者で、下が後者にあたります。

そして、後者の一群（狭い意味での花卉高杯）は、他地域では各遺跡で完成品（破損品）が1点ずつしか出土しないのに対して、青谷上寺地遺跡では未成品（作りかけのもの）をふくめて比較的たくさんみられます。このことは、他地域から出土した花卉高杯（のうちのほとんど）が、青谷上寺地遺跡で製作されて、他地域へ持ち運ばれた可能性を示しています。

私は、右図の下に配置した花卉高杯は、青谷上寺地遺跡でこのような精製容器の製作を主導・監理した首長層たちが使用するものではなく、あくまでも他地域へ輸出するために青谷の人々が作っていたものであろうと考えています。そして、実際に青谷上寺地遺跡を統括する首長層が使用したものは、図の上に配置した一群であると推定しています。これらはいずれも蓋がつく壺状のかたちをしており、5弁を陽刻したりスタンプ文とともに漆塗りの上に赤彩で表現したりしています。ここで何より重要なのは、これらが青谷上寺地遺跡のなかでも1点ずつしか出土していないことです。ま

た、これらの精製容器類は、器形（かたち）・文様（スタンプ文）などで、同じ青谷上寺地遺跡出土の精製土器と共通していることも大事な要素です。

これら「1点モノ」の精製（木製）容器類は、首長などごく限られた階層の人々が、マツリの中で使用し、それを一般の人々にみせびらかすことによって、首長層の権威の高さを示すことに意味がありました。そして、これら精製（木製）容器類が土器に写し替えられることによって、かたち・文様など上位階層での流行が、社会的により下位の階層に属する人々へと浸透していくのです（社

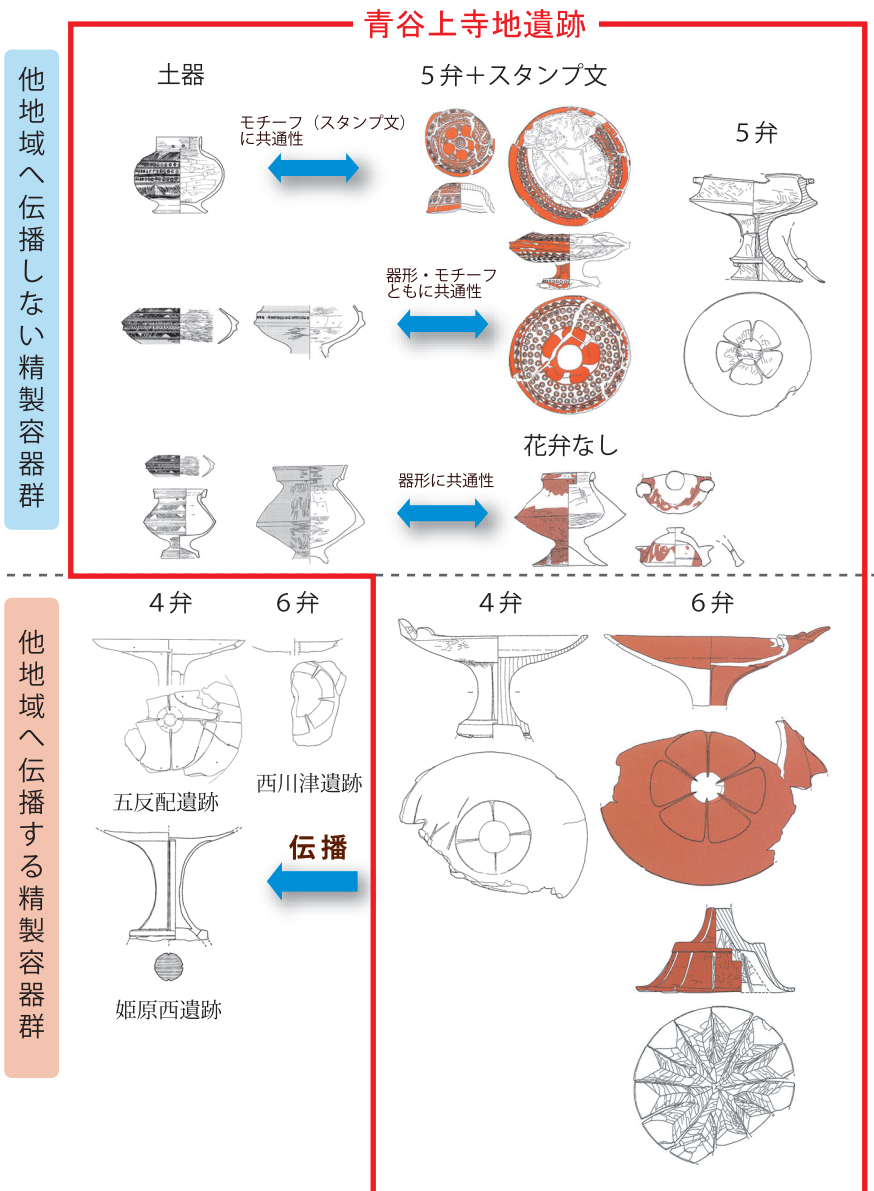


図60 青谷上寺地遺跡の精製容器群と他地域との関係

会学では「トリクル・ダウン理論」といいます)。

一方、図の下に配置した、他地域へ伝播し(輸出され)ていく4弁・6弁の陽刻をもつ花卉高杯は、青谷上寺地遺跡の土器に写されることがなかったことも、これらが本遺跡で使用されなかった証拠となるといえましょう。

2 花卉高杯と威信財システム

では、これら右図下の花卉高杯はどのような意味をもっていたのでしょうか。近年、文化人類学の分野では、「威信財システム」という理論が注目されています。文化人類学でいうところの「威信財」とは、①本来、実用的な意味をもたないが、一般の民衆に対して首長の権威を示すものであり、②その社会のなかでは生産されず、長距離交易で首長が外部の社会から入手するもので、③それを手に入れた首長は、さらに再分配することで自らの権威を得る、というものです。

私は、この他地域へと運ばれていった花卉高杯が、まさにこの「威信財」に相当するのではないかと考えています。つまり、これらは青谷上寺地遺跡で使われるものではなく、出雲平野や、北陸

の首長層に分配することによって、青谷上寺地遺跡を統括する首長の権威を高める効果をもつアイテムであったといえそうです。

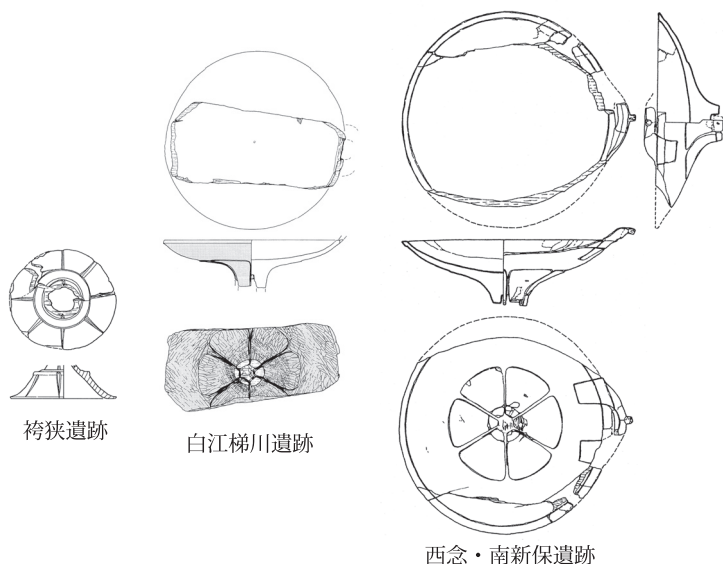
この「威信財」には、「ホームランド効果」もあります。これは、「威信財」の発信元が、それを受け入れる側(特に上位層)にとっての「故郷」であったことを「威信財」を通じて強く意識させるというものです。花卉高杯が青谷上寺地遺跡から日本海沿岸地域に発信された弥生時代後期には、山陰地方特有の墓制である「四隅突出型墳丘墓」もまた北陸地方へと伝播していったことがわかっています。つまり、北陸地方の首長のなかには、山陰地方に出自をもつ人々が少なからずおり、そのつながりが花卉高杯を受け入れる素地になった可能性があります。

花卉高杯にみられるような「威信財」の長距離交易が盛んになるのは、統一的な国家が形成される前段階の特徴です。それゆえ、古墳時代の前段階としての弥生時代後期を真に理解するためには、この「威信財」を集中的に製作していた青谷上寺地遺跡の実態を解明することこそが重要であるといえましょう。

S=1:12

6弁

伝播



精製容器と粗製容器

精製容器と粗製容器を区別することは意外に困難です。なぜなら、そこには様々な要素が絡み合っているからです。その要素として、用途・稀少性・素材、などがあげられます。

下の図は、弥生時代後期の青谷上寺地遺跡出土木製容器を、器種別にまとめたものです。破線より上は、食物などを盛りつける容器（食器）で、下は主に貯蔵用の容器と考えられます。実際に桶の中には炭化米が残っていた例があり、種籾などの貯蔵に使用されていたようです。

稀少性については、製作にかかる手間と仕上げの丁寧さが重要です。上の食器類の多くには赤彩が施され、花卉を陽刻するなどの凝った作りとなっています。しかし、桶にも赤彩例があることから、一概には区別できません。食器類のなかでも、左

側の一群はほとんどが一点ものですので、より稀少性が高いと推定されます。

素材では、食器類の大半がヤマグワやケヤキといった木目の美しい広葉樹材であるのに対し、下の桶はほとんどがスギです。ヤマグワやケヤキはスギに較べて硬い木なので、製作にかかる手間という点でも差があります。ただ、スギは太い木が多いので、大型の容器を作るのに適していることも重要なポイントです。

赤彩や花卉の文様を施した華麗な食器類は、多くの人々が集うマツリ場で、供物を盛りつけるのに使われたのでしょうか。そして、これらの食器をマツリの主宰者が捧げ持つ姿を一般の民衆に見せつけることにより、その権威の高さを示すことが最も重要であったのです。

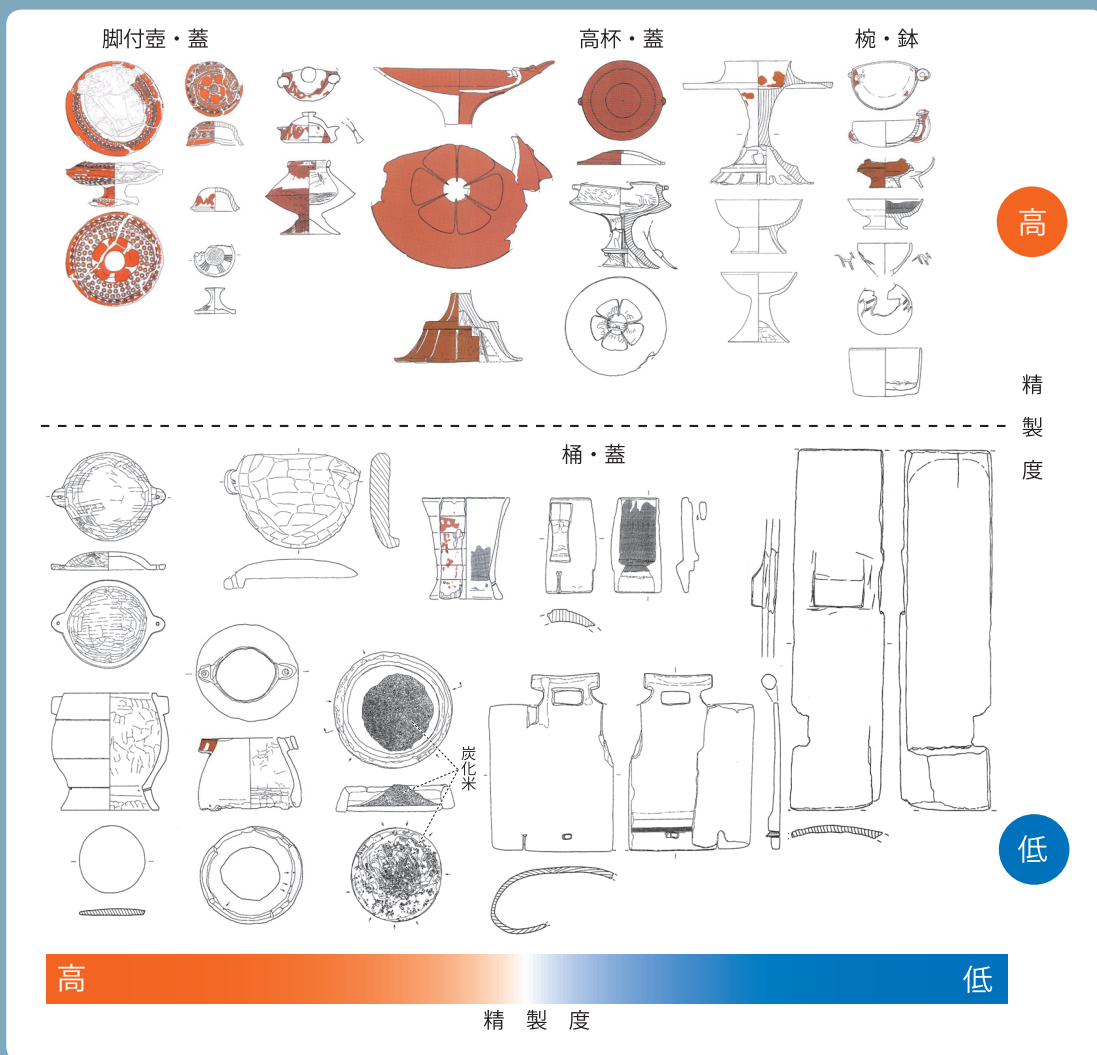


図 61 精製容器と粗製容器の相関図

ハレの食器と装い

「精製容器と粗製容器」でも述べられているように、花卉高杯をはじめとする精巧な木製の食器は、首長(ムラのリーダー)がマツリなどの“ハレの場”で使うことによって、人々に首長の権威の高さを示す役割を担っていたと考えられます。青谷上寺地遺跡からは、花卉高杯の他にも、首長がハレの場で使ったと考えられる精巧な貴重品が見つっています。

例えば木製の匙(スプーン)。三世紀頃の倭人の生活を記した中国の歴史書『魏志倭人伝』には、「倭人は手づかみで食事をする」と記されています。このことから、匙を使って食事をしていたのは身分の高い限られた人々だったと考えられます。

高杯や匙といった食器の他に、ハレの日の首長の身を飾ったであろう装身具も数多く見つっています。なかでも精巧な彫刻が施された櫛かんざしや簪は、花卉高杯と同じく優れた“匠”が首長のために腕を振るった作品でしょう。

翡翠の勾玉は首飾りとして使われたものでしょう。弥生時代、翡翠は産地の限られたブランド品であり、青谷上寺地遺跡の勾玉も北陸地方で採れた翡翠で作られたと考えられています。写真の勾



図 63 青谷上寺地遺跡出土の装身具(櫛、簪、管玉、貝輪)

玉は長さが約 4.6 センチもあり、弥生時代の翡翠製勾玉としては全国でも十指に入るほどの大きさです。

このような数々の遺物からは、大きな力を持った青谷上寺地遺跡の首長のもとに、腕自慢の匠たちや貴重な産物が各地から集まってきた情景が浮かんでいきます。いつの日か、首長が住んだ大きな館や、葬られた立派な墓がこの遺跡から見つかるかもしれません。



図 62 青谷上寺地遺跡出土の匙

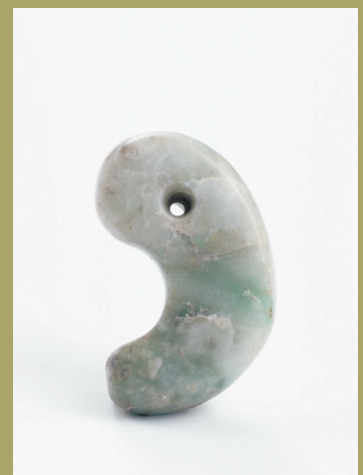


図 64 青谷上寺地遺跡出土翡翠製勾玉

青谷上寺地遺跡と花卉高杯

これまで見てきたように、青谷上寺地遺跡では花卉高杯が数多く出土しています。これはもちろん青谷上寺地遺跡が「地下の弥生博物館」と呼ばれるように、木製品や人骨など様々な遺物の保存状況が良好だったことが要因の一つではありますが、それにしても他の遺跡をはるかに超える量の花卉高杯は何を物語っているのでしょうか。

1 他地域との関わり

花卉高杯は、青谷上寺地遺跡以外では石川県と島根県でしか出土していません。島根県の場合は確実に花卉高杯と分かる状態のものは少ないのですが、石川県のものは非常に残りの良い状態のものがあります。まずは石川県のものとの比較を通して、青谷上寺地遺跡の花卉高杯をみていきたいと思います。

石川県金沢市西念・南新保遺跡から出土した花卉高杯は保存状態もよく、均整のとれた造形から

ロクロを使った「挽物」と推測されています。これは杯部中央のコンパス状の痕跡やCTスキャンを利用した画像解析の結果から導き出されたものです。青谷上寺地遺跡の高杯は手作業でいろんな方向に向かって工具で削った痕跡が認められ、また平面の形も正円とは言いがたく、「挽物」とはいえません。使用された木材は、西念・南新保遺跡のものは「ケヤキ」、青谷上寺地遺跡の6弁の高杯は「ヤマグワ」が多く（ニレ科1点あり）、耳の形状も異なります。

この2遺跡出土例の違いで他に注目されるのは、溝の形状です。青谷上寺地遺跡の花卉高杯の溝の断面形状はいずれもV字状をしているのですが、西念・南新保遺跡の場合は凹字状をしています。いずれも精巧な造りをしてはいますが、より丁寧な仕上がりをしているのは西念・南新保遺跡のものといえます。この特徴は製作した弥生の匠の違いによるものと思われます。また、デザインを同じ

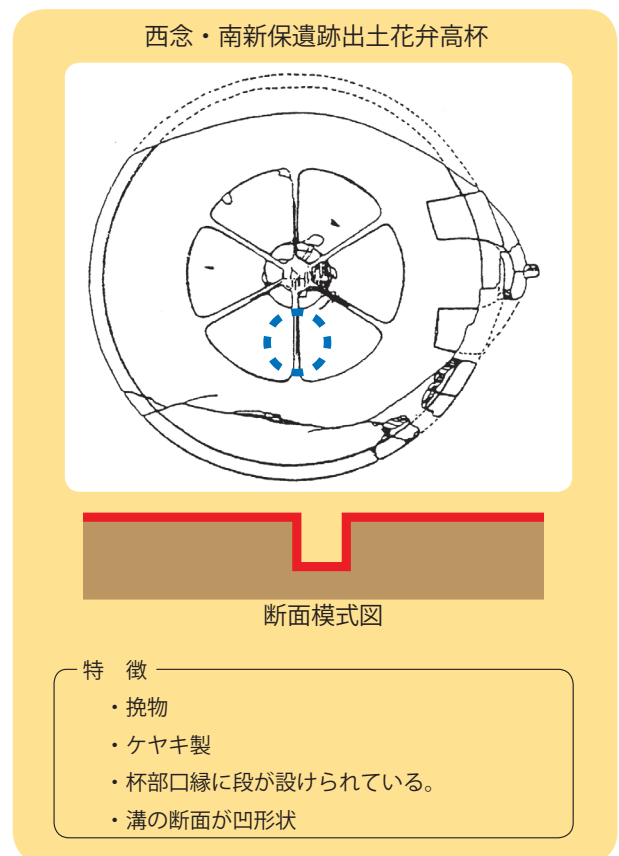
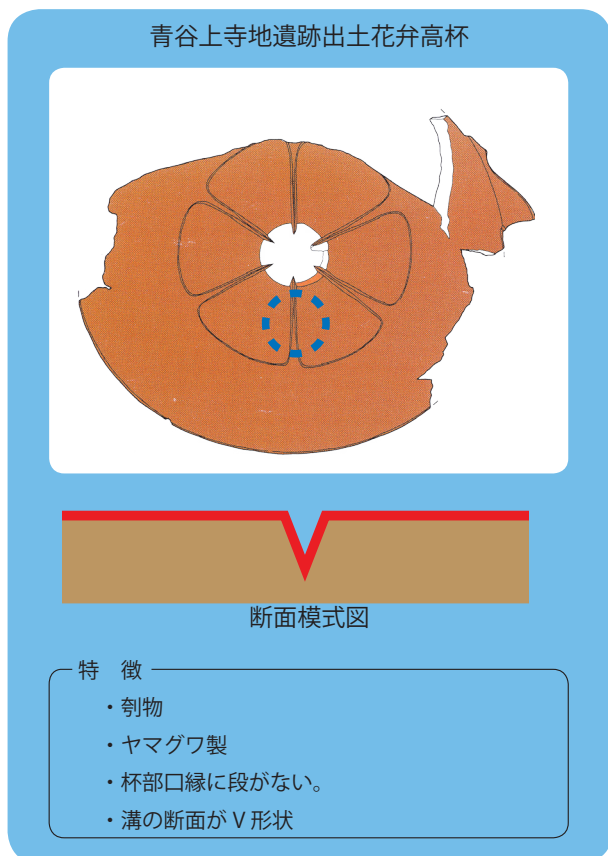


図 65 青谷上寺地遺跡と西念・南新保遺跡の花卉高杯の比較



図 66 青谷上寺地遺跡出土砥石

くしていることから、それぞれの製作者は直接的または間接的に交流を行っていたと考えられます。

2 木工職人の存在

一方、青谷上寺地遺跡では、九州以外の地域では鉄器出土量が突出しており、しかも鑿や鉋など小型の加工具が多いという特徴があります。中には袋状鉄斧を折り曲げたものや耳かきのような形をした工具も出土しており、細かい細工に適した形に改良されているようです。

現代の木工職人も、自分に合うように道具を改良して使用していますから、「道具のこだわり」というものが、弥生時代からすでにあったことがうかがえます。また、道具は常にそれを手入れするものとセットとなります。青谷上寺地遺跡からは「砥石」も大量に出土しています。しかも、現代でいう「荒砥」、「中砥」、「仕上げ砥」に相当する砥石が各種出土しています。当時貴重な存在であった鉄器を常に手入れをし、大切に扱いながら木製容器を製作していたことは容



図 67 青谷上寺地遺跡出土の舟・漁撈関連遺物

易に想像できるでしょう。

3 なぜ青谷に

青谷上寺地遺跡の集落の様相はまだ解明されていませんが、遺跡の立地と大量の出土遺物の中にヒントが隠されています。

まず、青谷上寺地遺跡は日本海側に点在する潟湖のほとりに位置し、天然の良港として漁撈活動や対外交易をおこなっていたことがうかがえます。それは単に立地だけではなく、舟材の出土や釣針や鉋などの漁撈具^{ざんし}の出土、魚介類の残滓^{ざんし}などからもうかがえ、航海技術に長けた人々が住んでいた証拠といえます。

この航海技術をもとに、海を介した他地域との交流の中で「鉄器」を入手することによって、木製品の生産が容易になったと考えられます。

また、木に対する知識や花卉高杯を製作する高度な加工技術は一朝一夕には体得できませんので、そうした技術を受け継ぐ木工職人の集団が存在していたと考えられます。

花卉高杯にみる「ものづくり」

花卉高杯は、弥生時代の木製容器の最高傑作というべき秀麗な造形美と、弥生の匠の技術力が注ぎこまれたものです。

一例を挙げると、花卉高杯の脚部には大きく透かしが入っていますが、実はこの透かしは単に装飾するだけでなく、乾燥による割れを防いだり、変形のひずみをうまく逃がしたりする効果も持っています。弥生の匠は、様々な経験を積み重ねながら、木の様々な性質を十分に理解し、知識として蓄積していたのでしょう。

また、素材となる木材も極上のものを使用しました。青谷上寺地遺跡で出土している花卉高杯に

は、いずれも年輪が細かく、樹齢が少なくとも数百年以上あろうかという素材が使われています。石川県の出土例も同様に年輪の細かい素材が使われており、青谷上寺地遺跡出土例と同様に極上の木材が使用されていたことがうかがえます。

このように、花卉高杯からは弥生時代の木製品製作の高度な技術の一端を読み取ることができます。花卉高杯のデザインは古墳時代には消えてしまいましたが、その製作技術や木に対する知識は、現代にも通じる非常に高度なものだったことがうかがえます。



図 68 青谷上寺地遺跡出土の花卉高杯

花卉高杯にみる「交流」

石川県、島根県では各遺跡で1点しか出土しない花卉高杯が、青谷上寺地遺跡で多数出土しているのはなぜでしょうか。理由の1つは、花卉高杯をはじめ、様々な「ものづくり」をおこなっていた生産拠点であったこと、もう1つは各地と様々な交流をおこない、人と物が行き交う「交易拠点」であったことです。

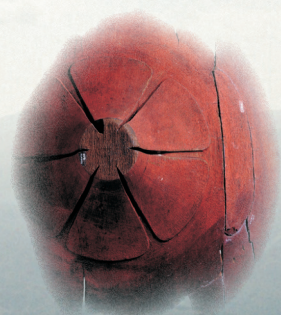
青谷上寺地遺跡では各地との交流を示すものが多数出土しています。例えば、北陸・近畿・山陽地方の土器、九州地方の特徴を持った袋状鉄斧や結合式釣針、近畿式の銅鐸や中国・朝鮮半島製の鉄器・貨幣・土器など枚挙にいとまがありません。

日本海沿岸に立地する遺跡間では、翡翠製勾玉や鉄器の出土量の多さなど密接な交流があったこ

とがうかがえます。また、四隅突出型墳丘墓のような墓制の類似性からは、集落同士の政治的つながりも垣間見えます。

しかし、花卉高杯は青谷上寺地遺跡以外では石川県と島根県の限られた遺跡でしか出土していません。これは、青谷上寺地遺跡で作られた花卉高杯が単なる交易品ではなく、これらの遺跡がそれを所有し、使用するという共通した文化を持っていたからだと考えられます。

つまり、花卉高杯は山陰と北陸を結ぶ交流のシンボルといえるでしょう。



花卉高杯



翡翠製勾玉



銅鐸



結合式釣針



中国・朝鮮半島の遺物

特別寄稿

「弥生時代」の権力表示器具類について考える

首都大学東京大学院人文科学研究科教授 山田昌久

1 権力表示器具の製作・配布・保有

青谷上寺地遺跡は、木製品や骨角製品の製作技術に長けた、優秀な工作技術集団の居留地と考えられる。中でも、他の弥生時代遺跡とは異なる出土木製容器群は、「首長」の身分を表示する器具とされ、「弥生時代」「首長」研究に課題を投げかけている（樋上 2004）。また、「優秀な工作技術集団」については、従来型の「首長」にかえられたり、「移動製作」する独立性を有した姿で理解したりするのではなく、「弥生社会」における身分的位置を議論することも、必要と考えられる。

さて、青銅製器具群・塗装木製器具群・玉やガラス製器具群などを、社会の上位階層が権力や地位の表示として使用するというのは、日本の「弥生時代」社会のみの特徴ではない。むしろ、中国の殷周（青銅彝器など）から漢代のそれが、本体だとする事ができるであろう。権力表示の器具群は、「礼器」・「兵器」・「日用品（例えば鉄製農耕具類の管理）」などと多様で、墓に収められた「明器」にも、類似意識が込められているかもしれない。

これらの権力表示や社会儀礼にかかる器具類の日本列島への移入は、だから、経済面での技術群の移入と無関係ではないと考えられる。日本列島の居住者に伝えられた、新たな生活構想や社会構想とその移転に係る歴史形相は、従来の「縄文時代」「弥生時代」の「生業による二時代区分」ではもはや整理できず、「社会整理による新たな時代区分」を要求しているのである（山田 2005）。

今回のフォーラムで取り上げる、塗装木製器具群の一括生産と配布には、自然村の地域内統合を行なった「首長」の権力表示器具であるばかりでなく、その統合者である「首長」間の関係構築のための贈与という「地域の

組織化」といった社会変容の存在が見え隠れしている。

「弥生時代」の時間には、日本列島の地域ごとに不均等に社会変容が進行している。「弥生時代中期」には、中国からの「威信財」を権力表示器具類にした、北部九州の伊都国・奴国王が突出した存在であった。しかし、「弥生時代後期の中で」、それまで九州製青銅器具で権力表示（この時点では九州の権力も他世界権威という意識であったと思われ、「威信財」という用語使用も可能かもしれない。）をおこなっていた西日本の「首長」が、近畿圏（大和）の首長を中心とする広域連合体として、北部九州権力からの離脱を行なっている。

近畿地方での青銅器生産の開始は、自前で権力表示器具を製作する形へ変質したことを示し、また「信」を問う器具を配布する存在になったことを示している。そして、山陰類型（青谷上寺地遺跡）の「平滑仕上げ木製（塗装）高杯」の日本海沿岸配布や、「弥生時代末」から「古墳時代初頭」の北陸類型の「平滑仕上げ木製（塗装）高杯」の近畿地方配布には、「出雲」や「吉備」の「首長」が、山陰・北陸地方の「首長」と提携していく様子や「大和」に連なる方向へ舵を切った様子が秘められている（この時点で「信」を集める器物が、①自作、②社会内製作、③配布による社会統合、などと、結果としての社会分化として、製作・使用されることとなった）。はたして山陰類型の配布計画者（首長）や北陸類型の配布計画者（首長）は、製作地近隣の「首長」だったのか、「出雲」や「大和」の「首長」だったのだろうか。今回のフォーラムで、それらを見据えた検討がなされることを期待したい。

2 日本列島居住者内の社会編成と権力生成

日本の縄文時代から弥生時代という時間には、東アジアの生産技術や社会構想に関する情報や技術が、人と共に幾度も入り込んでいる。そして、①自然村の系統社会化、②地域社会の生成と「首長」の出現、③「首長」の連合・統合、などによって帰属社会の確立、他社会との関係の相対化が進んだ。つまり、この時期の東アジアの中国権力との関係は、①村落およびその長として意識された段階、②地域集団の「首長」として意識された段階、③連合体・統合体の「長」・「王」として意識された段階、があると考えられる。北部九州に中国権力と関係を持った「王」が出現すると、その「王」と提携する「首長」と、まだそれを国内「王」とは考えていなかった「首長」が



図 70 青谷上寺地遺跡出土の琴

存在することになる。当たり前のことであるが、日本列島居住者内の社会編成と権力生成は、ひとつの単位では議論できない状態であった。

中国権力の器物は、最初は断片的な波及・模倣であったことが縄文時代の物質資料（石棺墓・石剣石刀・青銅刀子など、支石墓・加飾高杯蓋漆器・有茎式石剣石鏃など）から想定される。

縄文時代晩期後半に特別な墓が顕在化する北部九州では、福岡県三雲遺跡加賀石地区1号支石墓、同長野宮ノ前遺跡12号木棺墓、同井田用会遺跡石棺墓、同田久松ヶ浦遺跡木棺墓土壙墓などから有茎式磨製石鏃や有茎式磨製石剣の副葬や、碧玉製管玉（装身具?）・壺（供献?）が出土する。この石器副葬の傾向は、弥生時代前期初頭の福岡県曲り田遺跡2号甕棺や、同白玄社遺跡24号木棺墓などにも引き継がれる。こうした石器写し器具の副葬は、大韓民国扶余の松菊里遺跡の石棺墓に系譜を求めることが出来る。

この石器副葬は、「特別な人」の存在を示しており、中でも有茎磨製石剣は、「特別な人」の拡散を示している。東は、玄界灘沿岸を経て遠賀川下流域、周防灘を経て愛媛県松山周辺、そして四国北岸を経て大阪湾沿岸に伝わり、南は、福岡平野から筑後平野朝倉地方を経て大分県日田地方に伝わる（柳田1985）。この時期には福岡県今川遺跡で銅鏃や銅鏃が発見された例はあっても、青銅器の墓への副葬は一般的でない。これは副葬品に限らないことで、掘削器具研究史での東アジア鋤鋤類の固定法と関連させて、紀元前1000年紀前中期の突帯文期の木製鋤が前漢鉄鋤の木器代替ではなく、石器段階の器具と位置づけられていたことと重なっている（山田1994）。中国東隣の集団群の当該期の器具は、基本的に石器代替・石器加工の段階だったのである。

弥生時代前期末になって、朝鮮半島製の銅剣・銅矛・銅戈が、北部九州にも入り込む。そして、福岡県諸岡遺跡例などの、甕棺墓という特徴的な墓制と連動して、北部九州に広まる。甕棺墓普及以前の、福岡県吉武高木遺跡3号木棺墓からは、多鈕細文鏡と銅剣・銅矛・銅戈・勾玉・管玉が発見されているが、「王」の墓が群墓から離れた独立墓であることを要件とすると、この段階の「特定集団墓」は「王墓」とはできないが、「権力の萌芽」は示されている。漢の鉄製鋤模倣木鋤が使用される空間である。

一方、近畿地方では、弥生時代前期末～中期初頭に特定集団墓と考えられる方形周溝墓が造られるようになる。しかし副葬品は無く、「首長」と呼ばれる被葬者の「権力」の「信」の得かたは、同時期の九州の吉武高木遺跡



図71 青谷上寺地遺跡出土の紡織具

の権力者が、朝鮮半島製の青銅器保有によっていたものとは明らかに異なるのである。この空間では九州とは異なる円形柄孔木鏃が使用されている。

つづく弥生時代中期後半には、「王権構想」自体が、大きく変形を経たものではあるが日本列島の居住者に（人の移住も含めた形で）導入されている。江戸時代黒田藩の国学者青柳種信は『柳園古器略考』に、福岡県三雲南小路の甕棺墓で大小35面の前漢鏡・銅剣・銅矛・銅戈、そしてガラス璧・勾玉、管玉が収められていたことを記している。この地では1974年から福岡県教育委員会の発掘によってもうひとつの甕棺が発見され、そこにも前漢鏡22面以上が副葬されていたことが判明している。墓域を特定区域に定め、中国の権力から渡された器物を副葬品とする、この2つの甕棺墓被葬者は、外部勢力からの器具＝『威信財』によって配下の人々の「信」を得る存在であった。

北部九州以外の日本列島西部地域の社会編成は、「弥生時代」中期から「古墳時代」前期の時期に進んだが、その研究が九州との関係に目配りが少ないことは、近畿地方王権生成論を単調にしている。「銅鏡」・「福田式銅鐸」・「大型銅矛」など九州産の器物を、「信」を得るための財とした、中四国（出雲・吉備）の「弥生」「首長」が、やがて近畿・東海地方の「首長」との関係構築にシフトした動向の中で、今回のフォーラムで取り上げる「平滑仕上げ木製（塗装）高杯」も、一定の役割を果たしたと考えられる。この山陰という空間では縄文時代から存在した緊縛固定木鋤が活躍する。

3 「権力表示器具」「儀器」の変質

弥生時代から古墳時代の「首長」「王」の、権力表示構想は多様である。日本という単位が無い時点では、中国権力や九州権力由来の青銅製器物の場合、「舶載品」「仿製品」という枠組みは意味を成さない。どちらも外部社会という意味で、「威信財」という用語の内容に近い概

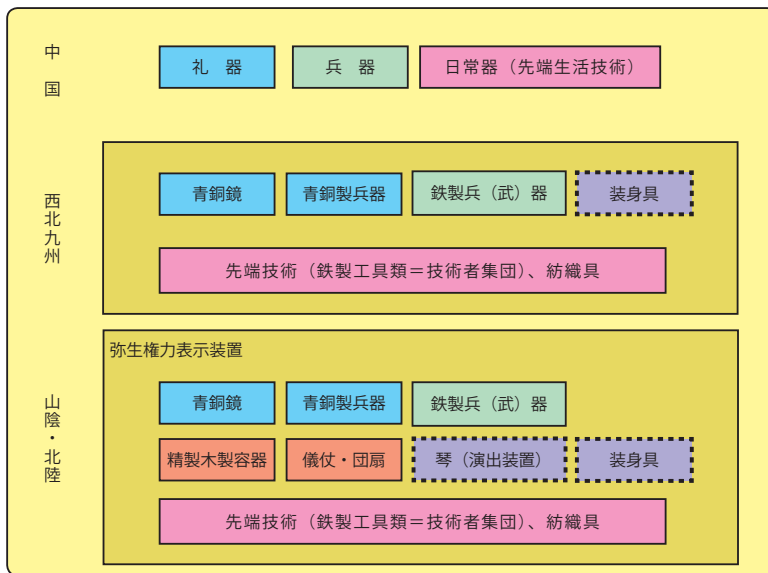


図 72 各地の権力表示を示す遺物構成

念が成立するのである。

さて、先端技術の生活器材も「今山」「立岩」産石材を使用した石器などは、実利の配布であり、鉄製工具・武器の供給保有などと同様に、「権力表示装置」に含めることができる可能性がある。また、器物の使用自体に社会的価値が表現される場合、製作者の価値は必ずしも必要ではない。「平滑仕上げ木製(塗装)高杯」も、実は先行して高知県居徳遺跡、兵庫県丁・柳ヶ瀬遺跡、大阪府池島・福万寺遺跡例のように、すでに縄文時代晩期末から弥生時代前期には、蓋付形態で典型的に西日本の集落で保有される器物になっている。この器物は製作技術の特殊性から、贈与者の価値が背景に存在した可能性はあるが、使用状況に社会的意義が存在しているため、土器写しなどが図られ、供献行為自体の意義が共有化されたと考えることができるのである。

弥生時代・古墳時代の木製祭器の内容は多岐にわたるが、権力表示構想を整理することが無かったため「祭祀遺物」の区分概念は錯綜している。たとえば、七夕(棚機)の節句祭祀=乞巧奠では、琴・机・水盤・布・糸・燭台・梶の葉なども祭祀の場で使用される器具であるが、物質資料研究では、それらを祭祀用具とは規定できない。また、古墳時代前半の石製模造品に、工具類や棚機以前の機織器具も含まれることなどからは、「首長」の祭祀に最先端の生活器材が使用されていたことの痕跡と考えることができる。また、琴はその後天皇の奏でる楽器として、権力表示装置として長く使用された歴史がある。

西北九州の「伊都国」や「奴国王」は、前述のように、中国の権力から受けた青銅鏡や青銅製兵器を権力装置として利用しているばかりでなく、蒜頭壺という中国平原

の器の模倣である瓢箪形土器や、その流れの結果としての特異な器形の壺形土器の盛行、方形柄孔鍬という漢の鉄製鍬の素材代替鍬使用などもおこなっている。この地の権力は(おそらく朝鮮半島南部の人類社会とともに)中国王との対比のなかで、自らの「信」を価値付け、技術群も模倣した「首長群(国)」であった。この「伊都国王」は、その副官までも「青銅兵器」を保有する存在で、鉄製武器を副葬される階層はさらに下位の存在と考えられる、多重層社会の形成者である。この王は、見渡せる範囲の一平野を領域とするばかりでなく、その範囲は大きくは甕棺埋葬圏(方形柄孔鍬=漢式鍬使用圏)を単位とすることもでき、玄界灘沿岸域から筑後平野・佐賀平野へと広がる、という空間形成の道を歩んだと考えられる。

だと考えられる。

この重層「首長」群からなる社会は、王が自らも青銅礼器(鏡や兵器)を造らせ、「信」を問う装置を作り出していた。つまり、「威信財」から自前の「見せびらかし装置」によるものへと、権力表示装置の構造変質をおこなっていた可能性がある。また、この王は配下の「首長」に対して「信」を問う装置を与える存在であった可能性も高い。つまり奴国産の器具を授け・受け取る形で首長権を主張するグループが形成されたのであろう。しかし、器具を受けとって、それを「帰属」の証拠と考えたり、自集団内の「信」を得るためのものと考えたりしなかった「首長」もいたであろう。

さらに弥生時代中期には、青銅製方形基調の容器を木製で代替した「平滑仕上げの精製容器」が存在する。これらは自作品(外部品ではないという意味)でありながら、「首長」の「見せびらかし装置」になっていた可能性がある。

4 瀬戸内「首長」の「権力表示装置」

さて、西北九州の弥生「王」のような存在は、日本列島の他の地域では確認できない。ここに、弥生「首長」の地域格差をどう整理するか、という課題が生まれ、「儀器」の議論もそれに連動して説明整理が要求されることとなる。

岡山県南方遺跡や兵庫県玉津田中遺跡には、青銅製武器を木製で代替した「儀器」=「武器形祭器」が存在する。これらの遺物が「配布品」か「自作品」かは、現時点では判断材料が無い。「青銅製祭器」を保有できない「首長」とすると、程度は異なれ重層社会であったとなるのであ

るが、この「首長」は権力装置の自作者であったことになる。ただし、匙の存在する遺跡は、日本の中では「旧国」レベルの空間で多数認められる存在ではなく、「上位」の「首長」として差し支えないといえる。また、平滑仕上げの木製容器群や、「儀杖」などの存在も認められる。ここに、「威信財」という「誇示装置」から、「首長」の存在を物語る器具類という形へと「指標器具」的な理解への、(考古学者の)判断基準の揺らぎの問題を、研究史として整理する必要性が指摘できる。制度社会以前の「祭礼者王」は、「誇示装置」以外にも多くの「指標装置」を保有しており、それらを素材に「首長」を語ることが、それはそれで可能なことなのである。

5 権力表示装置としての精製高杯

青谷上寺地遺跡の平滑仕上げ木製(塗装)容器群のなかでも、花卉を浮き彫りにした「精製高杯」は、山陰・北陸の「四隅突出型墳丘墓分布地帯」の器具として特徴的な存在である。そして、青谷上寺地遺跡は、その発見量の多さと製作途上の遺物の存在などからして、その製作地であったと考えることができる。

問題は、これまでの弥生時代の「首長」の存在と関わるとされてきた、この「精製高杯」が多量に出土した青谷上寺地という場所は、「山陰」地方の中心「首長」が居住するには空間的に狭い点にある。そこで、これまでの遺跡価値判断が、そうした権力表示装置の存在から直接的になされた、弥生首長論を修正する必要性が生じた。花卉数の安定化へ向けた変遷が辿れるということは、この地でこの「権力表示装置」が整えられていった可能性を示している。そして、この技術者集団は、決して木工のみの専門集団ではない。まだ成果が形になってはいないが、骨角器製作にも鉄製工具は深く関わっているようで、むしろ最先端の鉄製工具類を携えた、特殊技術者集団(渡来系?)なのである。もちろんこの集団自体が「山陰首長」の「有力配下首長」であったとも考えられる。

また、山陰・北陸地方の遺跡から発見されるこの精製高杯にクワ属材を使用している点は、中国王の弓材や先端技術としての機織技術と、もしかしたらどこかで繋がっている用材選択なのではなかろうか。この精製高杯は最後には再度加工されて木庖丁として再び生命を与える。ここにも実用以外の「価値投影」がなされているのかもしれない。

青谷上寺地の地で製作された「精製高杯」は、海を運ばれて出雲や北陸の「四隅突出型墳丘墓」共有首長群に配布されている。すると、青谷の「技術集団」を配下にしていた「首長」は、「精製高杯」の配布者をただ委託

を得ておこなっていたのであろうか。それとも、配布行為に「信」を与える意義が込められていたのだろうか。

もし后者であるとする、「出雲」王権とは異なる「権力」を鳥取平野や米子平野に求めるのか、青銅「兵器」「礼器」を多く保有してきた出雲王権自体をその上位「首長」とするのか、といった課題が生じることになるのである。

【引用文献】

滋賀県立安土城考古博物館

2005 『王権と木製威信具—華麗なる古代木匠の世界—』

寺沢 薫

1979 「大和弥生社会の展開とその特質—初期ヤマト政権成立史の再検討—」『橿原考古学研究所論集』4 吉川弘文館

2004 「首長墓の出現と副葬品—弥生～古墳時代初頭—」『考古資料大観』10 小学館

樋上 昇

2004 「集落・居館・都市的遺跡と生活用具」『考古資料大観』10 小学館

柳田康雄

1985 「発掘された倭人伝の国々」『日本の古代』1 倭人の登場 中央公論社

1986 「集団墓地から王墓へ」『図説発掘が語る日本史—九州・沖縄編』新人物往来社

2007 「卑弥呼を共立したクニグニ」『季刊考古学』100号 雄山閣

山田昌久

1994 「農具の形態と機能—(中国)文献資料との接点—技術史から見た農具」『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』静岡県埋蔵文化財研究所・東日本埋蔵文化財研究会・東海考古学フォーラム

2000 「考古資料から畑を考える」『はたけの考古学』日本考古学協会 2000年度鹿児島大会資料集第1集

2005 「縄文・弥生幻想からの覚醒」『食糧獲得社会の考古学』現代の考古学2 朝倉書店



図73 妻木晩田遺跡洞ノ原墳墓群(弥生時代後期)

【図版目録】(写真提供者・図版作成者)

- 2頁 図1 空からみた青谷平野
- 3頁 図2 サメが線刻された土器
図3 中国や朝鮮半島から運ばれた遺物
図4 矢板を用いた木造構造物
- 4頁 図5 青谷上寺地遺跡出土木製容器の器種組成
図6 青谷上寺地遺跡出土木製容器の樹種割合
- 5頁 図7 青谷上寺地遺跡出土の木製容器
- 6・7頁
図8 弥生時代の代表的な木製容器
○池子遺跡群 高杯(逗子市教育委員会)○川合遺跡 高杯(静岡県教育委員会)○朝日遺跡 高杯(愛知県埋蔵文化財センター・一宮市博物館)○六大A遺跡 曲物(三重県埋蔵文化財センター)○鬼虎川遺跡 高杯(東大阪市教育委員会)○池島・福万寺遺跡 高杯(財団法人大阪府文化財センター)○唐古・鍵遺跡 蓋付高杯、四脚容器(田原本町教育委員会)○西念・南新保遺跡 桶(金沢市教育委員会)○八日市地方遺跡 合子(石川県埋蔵文化財センター)○袴狭遺跡 高杯(兵庫県立考古博物館)○姫原西遺跡 ジョッキ形容器(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)○海上遺跡 合子(出雲市)○南方(済生会)遺跡 ジョッキ形容器、彩文高杯(岡山市教育委員会)○惣利遺跡 杯形容器(筑前町教育委員会)○生立ヶ里遺跡 漆塗り槽(小城市教育委員会)
- 8頁 図9 青谷上寺地遺跡出土の花弁高杯復元品 図10 花弁高杯模式図
- 9頁 図11 木製高杯脚部の変化 図12 兵庫県下加茂遺跡の横杓子(兵庫県立考古博物館) 図13 ハスの花
- 10頁 図14 花弁文様の変化 図15 青谷上寺地遺跡出土高杯 図16 杯部の花弁文様(拡大) 図17 島根県姫原西遺跡出土高杯(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター) 図18 島根県五反配遺跡出土高杯(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
- 11頁 図19 青谷上寺地遺跡出土高杯 図20 青谷上寺地遺跡出土高杯 図21 青谷上寺地遺跡出土高杯 図22 石川県西念・南新保遺跡出土高杯(金沢市教育委員会) 図23 石川県白江念仏堂遺跡出土高杯(小松市教育委員会) 図24 石川県白江梯川遺跡出土高杯(石川県埋蔵文化財センター) 図25 島根県西川津遺跡出土高杯(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
- 12頁 図26 青谷上寺地遺跡出土高杯 図27 青谷上寺地遺跡出土漆塗り壺 図28 花弁文様の配置と木材の繊維方向
- 13頁 図29 青谷上寺地遺跡出土の飾耳 図30 五角形の脚端部裏側 図31 四角形の脚端部裏側 図32 三角形の脚端部裏側 図33 輪状に連なる脚端部裏側
- 14頁 図34 刳物の高杯 図35 挽物の(可能性がある)高杯(金沢市教育委員会)
- 15頁 図36 「一木式」により作られた高杯の一例 図37 受部から脚柱部(上)、脚柱部から脚部(下) 図38 「組合せ式」により作られた高杯の一例 図39 組合せ式高杯の組合せ部分
- 16頁 図40 横木取りの木製容器 図41 縦木取りの木製容器 図42 木取り概念図 図43 青谷上寺地遺跡出土木製容器の木取り統計グラフ
- 17頁 図44 花弁高杯杯部の割付 図45 花弁高杯脚部の割付 図46 花弁高杯杯部の割付痕跡 図47 コンパス状の工具で円が描かれた木製品
- 18頁 図48 漆塗り壺内面の工具痕 図49 特殊な小型鉄製工具
- 19頁 図50 木製容器の製作工程
- 20頁 図51 青谷上寺地遺跡出土木製品に使用されている木材の例
- 21頁 図52 黒漆の下地に赤漆で文様を描いた壺 図53 赤く塗られた花弁高杯と飾耳 図54 赤く塗られた木製容器の塗膜構造(奈良文化財研究所)
- 22頁 図55 石川県金沢市周辺の遺跡分布図(石川県埋蔵文化財センター) 図56 金沢市西念・南新保遺跡遺構配置図(景山2005をもとに久田正弘作成) 図57 石川県小松市周辺の地形と遺跡分布図(大正8年5万分の一地形図をもとに久田正弘作成)
- 23頁 図58 石川県白江念仏堂遺跡 花弁高杯出土状況(小松市教育委員会) 図59 小松市白江念仏堂遺跡(右)と白江梯川遺跡(左)の位置関係(久田・石川2005を元に久田正弘作成)
- 24・25頁
図60 青谷上寺地遺跡の精製容器と他地域との関係(樋上昇作成)
- 26頁 図61 精製容器と粗製容器の相関図(樋上昇作成)
- 27頁 図62 青谷上寺地遺跡出土の匙 図63 青谷上寺地遺跡出土の装身具(櫛・簪・管玉・貝輪) 図64 青谷上寺地遺跡出土翡翠製勾玉

- 28 頁 図 65 青谷上寺地遺跡と西念・南新保遺跡の花弁高杯の比較（鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 木製容器・かご』・金沢市教育委員会 1983 『西念・南新保遺跡 I』より改変引用）
- 29 頁 図 66 青谷上寺地遺跡出土砥石 図 67 青谷上寺地遺跡出土の舟・漁撈関連遺物
- 30 頁 図 68 青谷上寺地遺跡出土の花弁高杯
- 31 頁 図 69 青谷上寺地遺跡の交流を示す遺物
- 32 頁 図 70 青谷上寺地遺跡出土の琴
- 33 頁 図 71 青谷上寺地遺跡出土の紡織具
- 34 頁 図 72 各地の権力表示を示す遺物組成（山田昌久作成）
- 35 頁 図 73 妻木晩田遺跡洞ノ原墳墓群（米子市教育委員会）
- ※写真提供者・図版作成者の記載の無い写真・図版はすべて鳥取県埋蔵文化財センター所蔵・作成

【協力者・協力機関】（順不同、敬称略）

山田 昌久 樋上 昇 久田正弘

奈良文化財研究所 米子市教育委員会（財）石川県埋蔵文化財センター（財）愛知県埋蔵文化財センター 一宮市博物館
金沢市埋蔵文化財センター 小松市教育委員会 逗子市教育委員会 静岡県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター
田原本町教育委員会（財）大阪府文化財センター 東大阪市立郷土博物館 兵庫県立考古博物館 鳥取県林業試験場
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 出雲市文化企画部 岡山市教育委員会 筑前町教育委員会 小城市教育委員会

【参考文献】

- 石川県立歴史博物館 2008 『弥生ムラの風景一越のクニ生み・境界・交流一』
- 石川県埋蔵文化財センター 2004 『畝田 B 遺跡・畝田 C 遺跡・無量寺 C 遺跡』
- 一宮市博物館 2002 『川から海へ 1 一人が動く・モノが運ばれる一』
- 景山和也 2005 「金沢市西念・南新保遺跡」『石川県考古学研究会々誌』第 48 号 石川考古学研究会
- 金沢市埋蔵文化財センター 1983 『西念・南新保遺跡 I』
- 工楽善通 1989 「木製高杯の復元」『弥生人の造形』古代史復元 5 講談社
- 古代オリエント博物館編 2006 『シルクロード 華麗なる植物文様の世界』山川出版社
- 滋賀県立安土城考古博物館 2005 『王権と木製威信具—華麗なる古代木匠の世界—』
- 島根県古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』
- 田中 謙 2004 「弥生時代鉄製工具論の可能性」『鉄器文化の多角的研究』鉄器文化研究会
- 鳥取県教育委員会 2003 『弥生の博物館 青谷上寺地遺跡』
- 鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡 1』鳥取県教育文化財団調査報告書 67
- 鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡 2』鳥取県教育文化財団調査報告書 68
- 鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡 3』鳥取県教育文化財団調査報告書 72
- 鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡 4』鳥取県教育文化財団調査報告書 74
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2004 『青谷上寺地遺跡 7』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 7
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 8
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2006 『青谷上寺地遺跡 8』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 10
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2008 『青谷上寺地遺跡 9』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 21
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』
- 樋上 昇 2004 「集落・居館・都市的遺跡と生活用具—中部—」寺沢薫編『考古資料大観 10 弥生・古墳時代 遺跡・遺構』小学館
- 久田正弘・石川ゆずは 2005 「白江梯川遺跡の木製高杯について—資料提示と問題点提起—」『石川県埋蔵文化財情報』第 14 号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 埋蔵文化財研究会編 1996 『古代の木製食器—弥生期から平安期にかけての木製食器—』第 39 回埋蔵文化財研究会発表要旨
- 山田昌久編 2003 『考古資料大観 8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館

青谷上寺地遺跡フォーラム

「弥生の至宝～花卉高杯とその背景～」資料集

発 行 平成 20（2008）年 8 月 28 日

編 集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒 680-0151 鳥取市国府町宮下 1260

電 話 （0857） 27-6711

発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

印刷所 株式会社 鳥取平版社

この冊子は 1,000 部発行し、1 部あたりの単価は 500 円です。